

佐田町の遺跡

西須佐地区



9年3月

町教育委員会

埋蔵文化財詳細分布調査報告書

佐田町〔3〕西須佐地区

図1 佐田町位置図



1989年3月

島根県佐田町教育委員会

発刊にあたって

昭和61年から3か年計画で実施した、本町の埋蔵文化財詳細分布調査は、今年度の西須佐地区の調査をもって完了することとなりました。

この地区の中で特筆したい遺跡は、八幡古墳、八幡宮別宮跡、高櫓城を中心とした城郭群と、『出雲国風土記』の中の「波多川に鉄有」の記述にさかのぼることが考えられている数多くの製鉄遺跡などです。

八幡古墳は、その形式から推定されて、古代における山陽と山陰の文化の流れを知る手がかりとなるものであります。

八幡宮別宮跡は、鎌倉期における中央とのつながりを求めた地方の願望。また数多くの城郭群は、戦国期の人びとの動向や政治、文化の流れを追求する一つの手がかりとなるものと思われます。

製鉄遺跡は、古代から近世末期までの長いあいだ、この地方の住民の暮らしに大きなかかわりをもっていたことは、諸史料や地元伝承、その数の多いことなどからもうかがい知ることができます。

今年度の調査結果は、さきに発刊された第1集『東須佐地区』、第2集『窪田地区』の報告書とともに、今後の本町の歴史の解明に役立つことを、ここから期待するものであります。

調査にあたっては、わずかな史料をもとにして町内の山野をあますところなく踏査された調査員の方がたと、適切な指導と助言をいただいた蓮岡法暉、勝部昭、杉原清一の諸先生と、島根県教育委員会文化課内の諸先生方に厚く感謝申し上げます。

おわりに、本調査にご協力いただいた町内各地の多くの方がたに深く感謝の意を表して発刊のことばとします。

平成元年3月

島根県佐田町教育委員会

教育長 佐貫光弘

例　　言

1. この報告書は、佐田町教育委員会が、文化庁及び島根県の補助をうけておこなう佐田町内の埋蔵文化財調査のうち、昭和63年度に実施した「西須佐地区」の調査の報告である。

2. 調査の体制は次のような組織で行った。

調査主体 佐田町教育委員会 佐貫 光弘（教育長）

調査指導 蓬岡 法暉（島根県八束郡八雲村立八雲中学校教頭）

勝部 昭（島根県教育委員会文化課課長補佐）

鳥谷 芳雄（島根県教育委員会文化課主事）

調査員 田中 迪亮（佐田町文化財調査委員）

岩崎 正敏（佐田町文化財調査委員）

永島 安徳（佐田町文化財調査委員）

佐々木敬志（佐田町文化財調査委員）

桐原 幸夫（佐田町文化財調査委員）

調査補助員 山崎 順子

事務局 石崎 勉（佐田町教育委員会教育次長）

栗原 豊（佐田町教育委員会社会教育係長）

深井 健一（佐田町教育委員会社会教育主事補）

調査協力

調査にあたっては次の方の協力、援助をうけた。記して謝意を表する。

神田喜友、一ノ名清、藤原乙市、佐貫喜真、若槻甚市、田中博好

杉山政法、小林有好、角森嘉市、土出治諸、今岡秋吉、安食照雄

長島為市、今岡宏一、安食虎良

3. 本書の執筆・編集は、蓬岡法暉、勝部昭、鳥谷芳雄の助言を得て、田中迪亮がおこない、栗原豊、山崎順子がこれを助けた。

4. 本書に記載する遺跡の名称及び地名は、西須佐地区の切図と土地台帳から収録した「小字名」を基にしたが、一部は地元伝承の通称名も取り入れた。

5. 本書に記載する図面の方位は、すべて調査時の磁北である。また、調査に使用した地図は、主として「中国山地基本図」5千分の1地形図である。

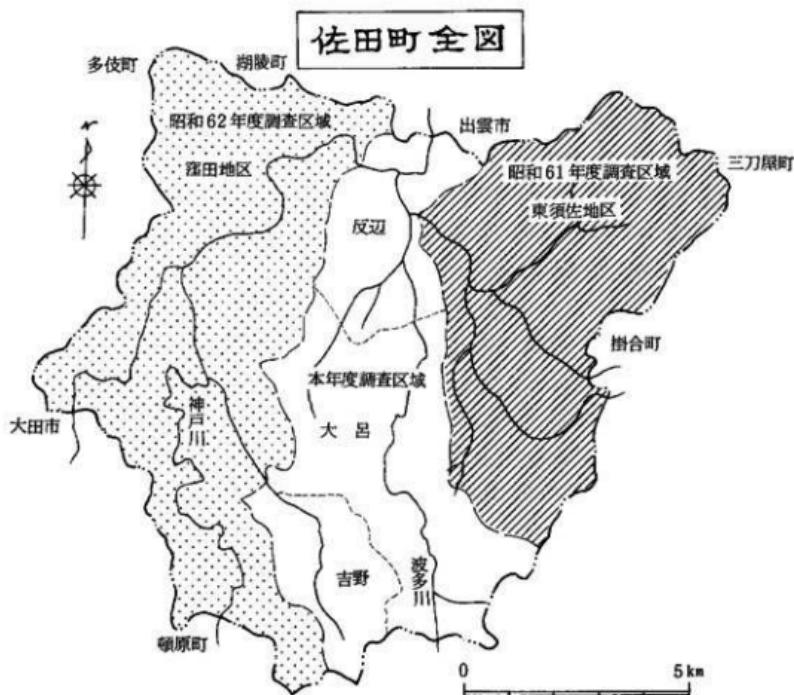
6. 城跡略測図の地ぼう表現について、ケバ線は等高線に直交する角度を示し、その下部に遺構がある場合は、点線で区画して壁の上下を表現する。

ケバ線の先端部に遺構がない場合は、ケバ線を引下したまま、あとは等高線によって高さを現わすこととした。

また、急斜面はケバ線の間隔を密にし、緩斜面は間隔を疎にした。等高線の間隔は、

10 mの高度差を現わす。

7. 調査成果は、分布図及び一覧表とするほか、「埋蔵文化財包蔵地カード」を二部作成し、一部は島根県教育委員会に提出し、一部は佐田町教育委員会において保管して、活用の資料とする。
8. 本書に記載した遺跡は、踏査による地表観察で得られたもので、平成元年1月末現在までのものである。



第2図 今年度調査区域図

目 次

表紙題字 佐田町 町長 土岩 純

序 文 佐田町教育長 佐貫光弘

例 言

本文目次

I 西須佐地区の歴史的環境と 遺跡の概要	1
II 西須佐地区遺跡一覧表	3
III 西須佐地区遺跡分布図	6
IV 遺跡各説	8
1. 古 墓	8
2. 城 跡	11
大字反辺地区的城跡	11
大字大呂・波多川流域の城跡	16
大字大呂・東山中地区的城跡	21
大字大呂・御幡地区的城跡	24
大字大呂・大山地区的城跡	28
大字吉野地区的城跡	30
※ 注	32
3. 生産遺跡	33
鉢 跡	33
窯 跡	34
4. 祭祀跡	34
5. 古墓・塚	35
V むすび	37
参考文献	39

挿入図目次

図- 1 佐田町位置図	中表紙
図- 2 今年度調査区域図	例言
図- 3 西須佐地区遺跡分布図	6
図- 4 八幡古墳実測図	9
図- 5 坂本古墳出土遺物実測図	10
図- 6 丹風山城跡略測図	11
図- 7 高幡城跡、明神山城跡 略測図	12
図- 8 秋森城跡略測図	14
図- 9 高西城跡略測図	15
図- 10 湯村城跡略測図	16
図- 11 才ノ咲城跡略測図	17
図- 12 茶磨山城跡略測図	18
図- 13 三の宮城跡略測図	18
図- 14 竜体谷城跡略測図	19
図- 15 丸山城跡略測図	19
図- 16 八幡山城跡略測図	20
図- 17 坂本・堂末城跡略測図	20
図- 18 東山中城郭群略測図	22
図- 19 東浦城跡略測図	23
図- 20 神馬原城跡略測図	23
図- 21 高丸城跡略測図	24
図- 22 大丸城跡略測図	25
図- 23 中屋城跡略測図	25
図- 24 板根城跡略測図	26
図- 25 柏王城跡略測図	26
図- 26 前岩瀬城跡略測図	27
図- 27 重羅城跡略測図	27
図- 28 大山城郭群略測図	28
図- 29 岩瀬城跡略測図	29
図- 30 打尾城跡略測図	29
図- 31 ゆうげ城跡略測図	30
図- 32 吉野城跡略測図	31
図- 33 古墓・石塔 石塔の残欠実測図	36

I 西須佐地区の歴史的環境と遺跡の概要

西須佐地区は、佐田町を南北に三分した場合、その中央部を貫通する地域で、反辺、大呂、吉野の三大字を包括する。

この地域を流れる主な川は波多川で、飯石郡掛合町波多を源流として北に貢流し、佐田町役場近くで神戸川に合流する。

地形は、波多川上流となる南部は急峻な地形で、両岸の山地は起伏に富んでいる。

南端の掛合町との境になる「羽幸大山」(727m)を最高地とし、最低地は佐田町役場付近の標高70mである。

東山中、御権、大山、吉野の各地区は山頂部に近く、緩斜面の中に耕地や居住地が点在する。

波多川流域は上流部で渓谷をなすが、大字大呂・上組付近から沖積平野が断続的にひろがり、段丘も漸次発達し、耕地や集落も増えてくる。

古代

地域の歴史的沿革は『出雲國風土記』(注1)によると、「飯石郡須佐郷」に属し、里が三つあったと伝え、大字反辺の「多倍社」は神名帳に登録された官社である、と記している。

波多川については、源流から流路の説明のあとに「鉄有」と記して、既にこの地方で砂鉄を原料とした「たたら製鉄」が行なわれていたことを示している。

古代の遺跡は、大字大呂の「八幡古墳」(町指定史跡)と「坂本古墳」がある。

また多くの鉱脈の中には、野鉱と推定されるものがあり、古代にさかのぼるもののが存在も考えられるが、時期を特定された遺跡はない。

そのほか、古代以前にさかのぼる遺跡、遺物は今までの調査では発見されていない。

中世

中世の遺跡は、山城跡が多く、その数は30か所を超える。

中でも大字反辺の「高橋城」は、須佐地区の中心となった城である。史料(注2)に登場する城主は鬼井永綱、本庄常光、熊谷広実で、尼子氏の台頭期から毛利氏との雲芸攻防戦、尼子の復興戦までの舞台となつた城である。尼子氏没落後は毛利氏の支配するところとなり、慶長5年(1600)まで続いた城である。

この高橋城を中心にして、支城と伝えられている城跡も多い。集落ごとに城郭群が配置されている状態をみると、この地域の中に、なぜこれほどに山城の数が、という疑問も生まれるが、山城築城期といわれる南北朝のころから、戦国時代末期の長い年月の間に、地域の政治、経済、文化の中心となる本城から、その領域の保全と強化をはかるために配置された小さな砦にいたるまで、臨時的なものから再利用、再々利用など社会情勢や生活の変化に応じた配置がなされたことを考えれば、決して異常な数ではないと思われる。

城跡の中から、鉄跡や鐵冶跡が発見されたものもあり、東山中地区では城の防塞として築かれた土壁の材料に鉄滓が使われていた例もあった。

大字大呂には、出雲国内の8か所の八幡宮、すなわち「八所八幡」と呼ばれる社の中の1社「須佐八幡宮」があり、現在は大呂神社に（注3）合祀されている。大呂神社社伝や地元の伝説によると、源頼朝が勧請したものといわれている。

この時代より後、石清水文書によると「建武四年十二月十二日、將軍足利尊氏當宮の願密岡宗興業の為、出雲須佐郷地頭職を寄進」（注4）とある。（石清水八幡宮領）

大字大呂の御幡地区には、かつて「瀧上山・柏王寺」があって、堂塔四十八坊があったが、尼子、毛利氏の鞍馬によって金山焼失したと伝えられている。

この時代のものと推定される古墓は、宝匂印塔、五輪塔、石積みの墓などである。これらは主に高橋城跡周辺の山麓に点在している。

近世

近世の遺跡は、製鉄遺跡、すなわち鉛跡が多い。

その中で操業年代が明らかなものは、近世末期のもので、規模の大きい高殿鉛である。そのほかの鉛跡は小規模なものが多く、野耕跡と推定されるものが多い。

製鉄業と地域住民との深いかかわりは、地名の分布からも見受けられ、「鍊、鉛、鉄、鉄穴、鉄、鐵冶、金屋子」などの字を前後に取り入れた小字名が多い。

祭祀跡は、須佐八幡宮跡と足利尊氏が社領を寄進した石清水八幡宮の別宮跡が知られている。

大呂地区の二百十石の社領については、松江藩主・二代の綱隆が寛文二年（1662）に広瀬藩を分封したことと、大呂地区が広瀬藩に編入され、その社領は松江藩内の大字反対に社殿とともに移されている。

寺院、堂なども多くあったことが、地名の分布によって知ることができる。大呂地区の一部だけでも「清泉寺、大願寺、善正寺、久光寺、慶雲庵」のほかに「寺床、堂、鐘突免、油田、比丘尼宿内、堂床」などがあり、生産遺跡と同様に住民との深いかかわりを示している。

注1、加藤義成校注『修訂出雲國風土記參究』（昭和56年）参照

2、勝田勝年校注『合載雲陽軍史記』、『飯石郡志』、『島根県史』、『須佐神社棟札写』

3、渡邊昇著『出雲稽古知今図説』所載「八所八幡宮之事」意宇郡八幡村平演、能義郡安田村安田、飯石郡大路村須佐、飯石郡佐見村油木、仁多郡馬場村横田、大原郡木次村來次、大原郡上佐世村佐世……以下略

『大呂神社社伝』（佐田町大字大呂）『佐田町の民話と民謡』（神馬原伝説）

4、『佐田町史』（昭和51年刊）『石清水八幡宮領、須佐別宮の起源及び広瀬藩成立による社地移転』。

「出雲國須佐郷、相模殿三十丁三反歩」（出雲大社文書）とあるように、尊氏が須佐郷北条氏の荘園を石清水八幡の社領として献じたことになっているが、社領と同時に八幡宮の別宮ができたかどうか、不明である。

II 西須佐地区の遺跡一覧表（図面番号は遺跡分布図番号と一致する）

図面No.	種別	名 称	地 目	現 状	所 有 地	所 有 者
1	古 墳	八 築 古 墳	墓 地	墓 地	大字大呂 222	佐 貫 寿 茂
2	古 墳	坂 本 古 墳	畠	畠	大字大呂 665-3	森 山 清
3	城 跡	舟 津 城 跡	山	山	大字反辺 2724-1	土 出 治 諸
4	城 跡	屏 風 山 城 跡	山	山	大字反辺 2900~	安 食 芳 一
5	城 跡	高 檜 城 跡	山	山	大字反辺 2614-3	安 食 周 一 外
6	城 跡	明 神 山 城 跡	山	山、墓地	大字反辺 3153	安 食 周 一
7	城 跡	秋 森 城 跡	山	山	大字反辺 2995	土 谷 修 一 郎
8	城 跡	曾 我 里 岭 城 跡	山	山	大字反辺 3263~	安 食 周 一 外
9	城 跡	高 西 城 跡	山	山	大字反辺 2271~2281	和 田 国 雄 外
10	城 跡	三 久 保 田 城 跡	田	田	大字反辺 3040~	岸 昭 一
11	城 跡	別 所 小 丸 跡	山	牧 場	大字反辺 3051	伊 藤 兵 市
12	城 跡	湯 本 村 城 跡	山	山	大字反辺 2201	和 田 国 雄 外
13	城 跡	才 ノ 岭 城 跡	山	山	大字大呂 1725 内 1	今 川 須 佐 男 外
14	城 跡	茶 濱 山 城 跡	山	山	大字大呂 2407	一 の 名 清
15	城 跡	三 の 宮 城 跡	山	山	大字大呂 2512	石 橋 美 法
16	城 跡	寺 床 城 跡	田	田、墓地	大字大呂 3753	杉 山 和 男 外
17	城 跡	竜 体 谷 城 跡	山	山	大字大呂 2003-5	森 山 栄 一 郎 外
18	城 跡	三 の 宮 小 丸 跡	山	山	大字大呂 1668-1	桐 原 一 男
19	城 跡	丸 山 城 跡	畠	畠	大字大呂 3864~	森 山 德
20	城 跡	八 築 山 城 跡	山	山	大字大呂 1999	小 林 有 好
21	城 跡	庭 反 城 跡	畠、墓地	畠、墓地	大字大呂 804-2	馬 漱 万 市 外
22	城 跡	坂 本 - 堂 床 城 跡	山	山	大字大呂 2616-1	藤 原 良 夫
23	城 跡	東 山 中 城 郭 郡	山、耕 地	山、耕 地	大字大呂 2066~	板 坦 昭 男 外
24	城 跡	東 浦 城 跡	山	山	大字大呂 2092-1~	横 山 輝 美 外

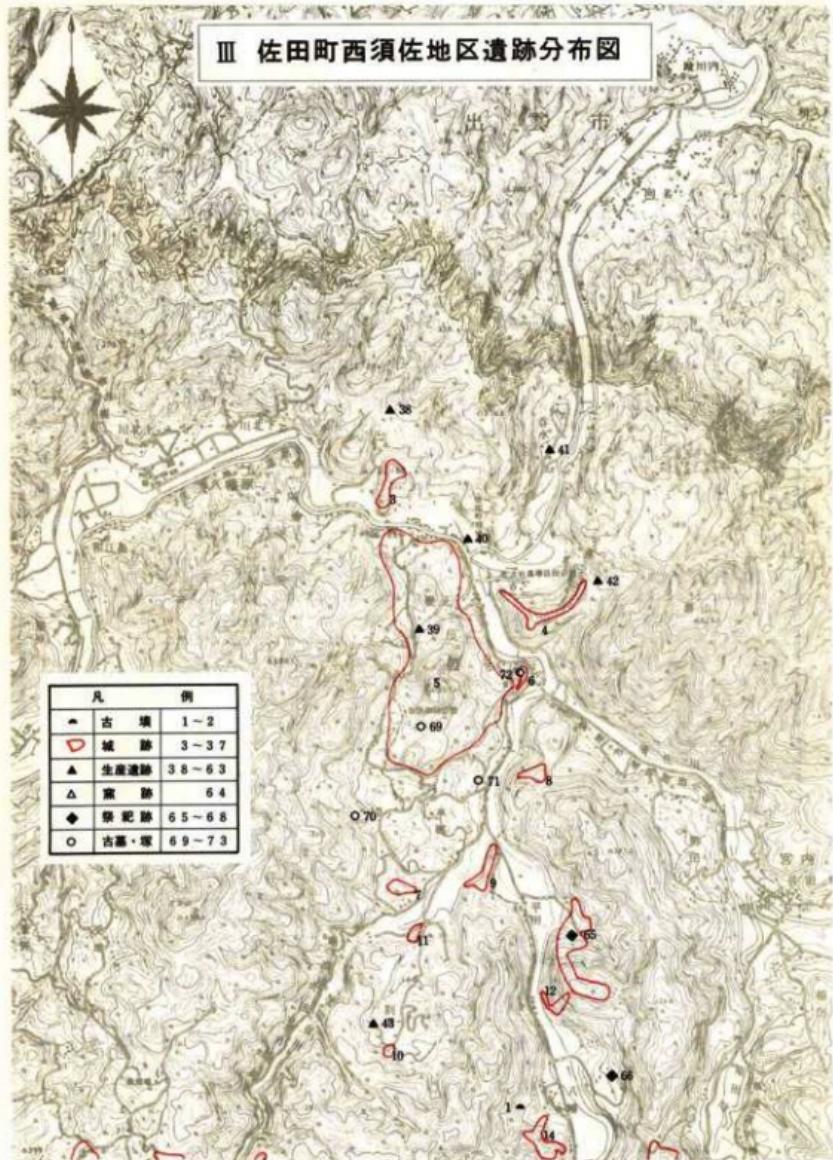
図面No	種別	名 称	地 目	現 状	所 有 地	所 有 者
25	城 跡	津 馬 原 城 跡	耕 地	耕 地	大字大呂 1848	板 垣 定 義
26	城 跡	高 丸 城 跡	山	山	大字大呂 2825-1	和 田 豊 志
27	城 跡	大 丸 城 跡	田、宅地	田、宅地	大字大呂 2877	田 中 博 好
28	城 跡	中 屋 城 跡	山	山	大字大呂 2913	渡 部 悅 治
29	城 跡	坂 横 城 跡	山、耕地	山、耕地	大字大呂 2989	藤 原 武
30	城 跡	柏 王 城 跡	宅地、田	宅地、田	大字大呂 2966~	若 枝 俊 徳 外
31	城 跡	前 岩 游 城 跡	山	山	大字大呂 3017	内 藤 邦 夫
32	城 跡	重 罐 城 跡	山	山	大字大呂 3291	佐 貢 輝 由 外
33	城 跡	大 山 城 郭 群	山	山	大字大呂 2727-3~	桐 原 直 市 外
34	城 跡	岩 游 城 跡	山	山	大字大呂 1271	森 山 一 吉
35	城 跡	打 尾 城 跡	山、田	山、田	大字大呂 1563~	神 田 英 一 外
36	城 跡	ゆ う け 城 郭 群	山、耕地	山、耕地	大字吉野 237~	神 田 正 则 外
37	城 跡	吉 野 城 跡	山	山	大字吉野 602	神 田 房 雄
38	生 産 遺 跡	塙 内 鋸 跡	山	山	大字反辺 2730	山 本 茂 生
39	生 産 遺 跡	土 落 鋸 跡	山	山	大字反辺 1473-2	桐 原 幹 夫
40	生 産 遺 跡	横 原 鋸 跡	田	田	大字反辺 1608	長 島 豊
41	生 産 遺 跡	呑 水 鋸 跡	田	田	大字反辺 1818	安 食 一 成
42	生 産 遺 跡	矢 須 寺 奥 鋸 跡	山	山	大字反辺 1930	安 食 文 吉
43	生 産 遺 跡	別 所 鋸 跡	宅 地	宅 地	大字反辺 546-1	岸 圭 一
44	生 産 遺 跡	榜 烟 燥 治 跡	烟	烟	大字大呂 553	桐 原 春 雄
45	生 産 遺 跡	田 ノ 幸 鋸 跡	田	田	大字大呂 1809-1	藤 原 倉 年
46	生 産 遺 跡	堂 ケ 谷 鋸 跡	田	田	大字大呂 1942-1	藤 原 薫
47	生 産 遺 跡	東 山 中 鋸 跡	山	山	大字大呂 2087-1	横 山 雄 美 外
48	生 産 遺 跡	大 内 鋸 跡	宅 地	宅 地	大字大呂 899	野 尻 秀 夫
49	生 産 遺 跡	岩 游 上 鋸 跡	山	山	大字大呂 3052-1	神 田 秀 義

図面No	種別	名 称	地 目	現 状	所 在 地	所 有 者
50	生産遺跡	大山鉛跡	山	山	大字大呂 2681-9	和田良則
51	生産遺跡	竹ノ下鉛跡	烟	烟	大字大呂 1472~	神田隆一
52	生産遺跡	大瀬谷1号鉛跡	山	山	大字高津屋 460	日高国夫
53	生産遺跡	大瀬谷2号鉛跡	山	山	大字大呂 534-1	角森嘉市
54	生産遺跡	打尾1・2号鉛跡	田	田	大字大呂 1570	森山真人
55	生産遺跡	吉野古鉛跡	宅 地	宅 地	大字吉野 24	石崎繁夫
56	生産遺跡	吉原鉛跡	田	田	大字吉野 3	石崎繁夫
57	生産遺跡	客ノ木鉛跡	宅 地	宅 地	大字吉野 77	大野恒雄
58	生産遺跡	小草江迫鉛跡	田	草 地	大字吉野 86	神田喜友
59	生産遺跡	新田原鉛跡	宅 地	宅 地	大字吉野 462	板垣ヤス子
60	生産遺跡	賀沢鉛跡	山	山	大字吉野 669	三浦芳明
61	生産遺跡	横屋奥鉛跡	田	田	大字吉野 300~	児玉武夫
62	生産遺跡	梅ヶ谷尻鉛跡	山	山	大字吉野 604	児玉幸雄
63	生産遺跡	草ノ本鉛跡	田	田	大字吉野 391	児玉幸雄
64	生産遺跡	吉野瓦窯跡	烟	烟	大字吉野 640	神田秀一

65	祭祀跡	湯村神社跡	山	山	大字反辺 3009	神社地
66	祭祀跡	熱田宮跡	神 社	神 社	大字大呂 101	神社地
67	祭祀跡	八幡宮別宮跡	山	山	大字大呂 1999	小林有好
68	祭祀跡	河内神社跡	山	山	大字大呂 2057	和田初則

69	古 墓	高橋城殿様墓	墓 地	墓 地	大字反辺 1153	(公有地)
70	古 墓	横屋奥古墓	山	山	大字反辺 1101	永井辰郎
71	古 墓	町・山伏塚	田	田	大字反辺 1215-1	伊達萬藏
72	古 墓	明神山古墓群	墓 地	墓 地	大字反辺 3153	安食周一
73	古 墓	藤反古墓群	墓 地	墓 地	大字大呂 804-2	馬瀬萬市外

III 佐田町西須佐地区遺跡分布図





IV 遺 跡 各 説

1. 古 墳

八幡古墳（佐田町指定史跡）

1. 位置と墳丘形態

この古墳は古くから開口していたものである。1987年に佐田町指定史跡にされたことを機会に実測を行った。

位置は、篠川郡佐田町大字大呂・八幡地区の波多川左岸。元西須佐小学校裏から西に登る谷沿いの段丘が行き止まりとなる山裾にあり、近世末期から墓地となっている削平地の先端部にある。（1987年3月発行の島根県遺跡地図において、#39番に該当する古墳である）

墳丘の形態は、墓地と耕地の造成のために削り取られ、との形は不明である。現状は蓋石が露出し、漢道の入口付近は崖の先端部となっていることから、一部は消失しているものと推定される。

2. 内部構造

内部主体は玄室と漢道の区別のない、いわゆる無袖形の横穴式石室である。

漢道と玄室内には、外側から割石を含む土砂が厚く堆積しており、正確な計測はできないが、およそ次のような規模である。

長さ4.0m、幅0.8m、高さ1.4mで南東に開口するプランであるが、漢道の前が欠失しており、との長さは若干長くなるものと推定される。

石組は5枚の蓋石のがこり、前側の蓋石は崩れ落ちている。奥壁は2枚の巨岩を使い、すき間を割石でおぎなっている。

側壁は、基部を大形の腰石で整え、上部にあがるに従って小さくなる割石を、ほぼ垂直に積みあげている。

3. 八幡古墳の特色

本古墳の所在地周辺の遺跡の分布をみると、東須佐・大字朝原の切石古墳（小形の横穴式石室）、大字原田の冢松山古墳群（箱式石棺）、和田古墳（横穴式石室と推定）、その周辺の横穴群をはじめ、遺物散布地が点在している。そこからは、弥生時代と推定した磨製石斧や古式土師器などが発見されており、古墳時代に先行する人々の歴史があったことは明らかである。

また、本古墳の位置から2km南側の上組地区からも、ほぼ同規模のものと推定した古墳が発見され、その近くで出土した須恵器は、古墳時代終末期のものと推定されている。

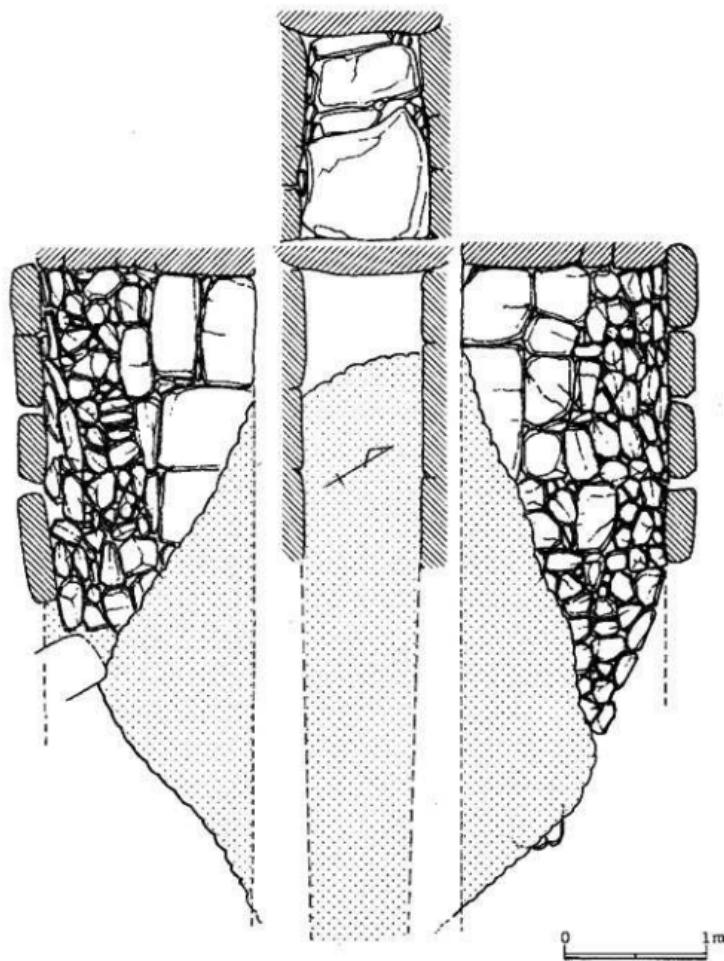
当地方の古墳に大形古墳は発見されていない。その中で八幡古墳の石室は比較的の規模が大きいことから、当地方の首長級の人物の墓とみることができる。

石室の形式についてみると、玄室、漢道の区別のない無袖形で、幅が狭く細長いという特徴がある。この傾向のものは山陽側に多く、後期古墳に盛行している。

この地域の南部、神戸川上流の額原町大字八神の比丘尼冢古墳は、やや大形の横穴式石室である。その形式は狭長で無袖で、八幡古墳と同じ部類のものである。

中国山地脊梁部に位置する当方が、山陽地方の影響を受けることは十分考えられることで

本古墳は遺物こそ検出できなかったものの、形式的には陰陽古墳文化の交流を示唆しているものといえる。



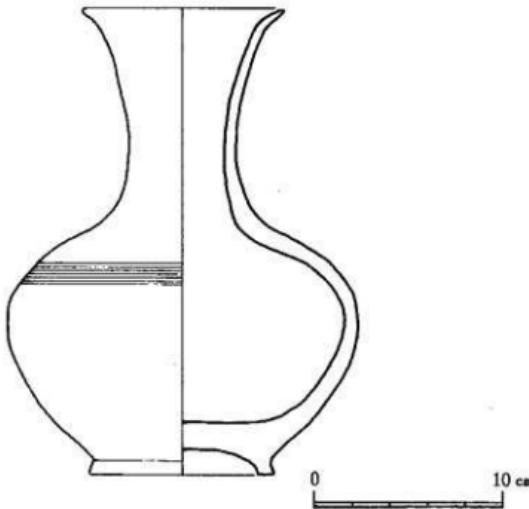
第4図 八幡古墳実測図

坂本古墳

この古墳は、大字大呂・上組公民館裏の斜面の端に、石室の構造と思える石材が部分的に残っている。蓋石や石室を構成するほとんどの石材は消失しているが、土中から頂部だけ露出している石材の配置から石室の規模が推定できる。主軸を南北におき、ほぼ真南に開口していたものとみられる。長さは 4.0 m、幅は約 0.9 m で、八幡古墳とほぼ同形の規模のものである。

漢道の部分は削り取られた崖となっており、崖面には大形の石材が積み重っている。

この斜面の突端で須恵器片が検出されたが、崖下の藤原家には、宅地造成の際に土中から出土した完形の須恵器（長頸壺）1 個が保存されている。須恵器はこの古墳のいずれかの部分に埋納されていたものと考えられ、その形式から本古墳は古墳時代の後期から奈良時代にかけて造営されたものと推定される。



第 5 図 坂本古墳出土遺物実測図

2. 城跡

大字反辺地区の城跡

この地域は神戸川と波多川の合流点を中心に開け、古くから各地方に通ずる街道の分岐点であることから、軍事的、経済的に重視されていたことが考えられる。

城跡は周辺の山々に厳密に配置されており、その中心となっていたのが高櫛城である。しかし、周りの山城のすべてが高櫛城の支城であったとは考えられず、中には攻城の拠点として構築された、いわゆる付城、向城などの存在も考えなければならない。

そのためには詳細な史料の収拾や検討が必要であるが、史料調査は本稿が求めるものではないので、城郭の実態についてその概略を述べることとする。

○舟津城跡（標高 167 m）一略測図を省略

反辺地区の西北端、神戸川沿いの山城で、南北に続く二つの丘陵からなる。

二つの丘陵の鞍部は細切となって旧街道の峠となるが、この街道は須佐方面から大字八幡原の二百山城跡の山裾を経由して、出雲に至る要路であることから、街道の押さえとして配置されたものとみられる。

複雑な遺構ではなく、階段状の曲輪を配置した単純な構造であるが、北側丘陵の山頂部の曲輪群は広く、居住地跡と推定される地形を残している。

○屏風山城跡（標高 210 m）

神戸川、波多川の合流点南側にあり、高櫛城に川を挟んで対向する位置にある。

遺構は、やせ尾根上に曲輪群と堀切、障壁などを連続させ、西側は攻撃不可能な断崖となって、北側の丘陵頂部まで続く。

この丘陵の東側の鞍部は広く、佐田町北端の「黒山」山裾となる。（この鞍部には小規模な跡跡がある。）

西側山麓の沖積地は「和立原」と呼ばれているが、地元の伝承によると、もとの地名は矢立原で、高櫛城との矢戦のあと、和議が成立したことから和立原になったという。

○高櫛城（標高 307 m）

須佐地区の中心となる城跡で、近世の地誌（注 1）によると、その支城は須佐地区全域にわたって配置されてい



第 6 図 屏風山城跡略測図



第7圖 高橋城跡、明神山城跡略測圖

たことを伝えている。

歴代の城主のうち、永禄年間は尼子方の家臣・本庄常光が城督であったとされる。常光は石見銀山山吹城主をも兼ねており、雲芸攻防戦記（注2）にもしばしば登するが、毛利方に移った直後に、彼の強さが禍いとして元就に警戒されるところとなり、永禄5年（1562）の秋、斐川町学頭においてその一族と共に肅清された悲運の武将である。

尼子氏解体後は毛利の家臣・熊谷広実がこの城を守り、戦国時代末期まで存続していた城である。

城の縄張りの広さは、町内の城の中でも抜群のものである。

全体の構造をみると、高櫻山の頂部を主郭として、周囲の丘陵、尾根に大小の城郭を配置し、主峰の孤立化を防いでいる。すなわち一城別郭方式の城である。

主郭部の構造は、南北にのびる広い削平地と北側の台地に八幡神の祠を建て、その東端下の通路は北にのびる稜線に結ばれるが、その間に小細切で遮断している。この主郭部北側の側面は攻撃不可能な断崖であり、北側の曲輪の先端も約10mの落差をもつ崖となる。しかし、この崖下の後線にも小曲輪と多重細切、また巨岩のすき間を利用して蛇行する通路が下降して、山腹の曲輪群に達している。この崖下から下降する通路は、北側の柵手とも考えられるもので、このように急峻な自然地形を利用して、やせ尾根上に防塞を構築する技法は、山城築城期の初期の特徴ともいわれている。

主郭部から南西に下る斜面には第二郭、第三郭の広い曲輪が設けられ、通路は迂回しながらこの側面を通過するが、第二郭の直下斜面には通路に並行する曲輪があり、これは横矢掛りに相当するものである。

また第三郭の下部斜面には、等高線に直交する6条の豊堀群と、南側にも1条の豊堀がある。この豊堀群は地方によってささぎ壁・馬かくしとも呼ばれるが、出雲では槍溝または連珠砦と呼ばれ、最近では「欽型阻塞」（注3）の用語が使われている。この欽型阻塞は緩斜面を強化するために構築されたもので、この緩斜面を攻め登る敵の横移動を封じ、上部からの落石や狙撃の効率を高める、いわば一種のわなである。

この豊堀群の直下には腰曲輪が設けられているが、これも敵をこの区域に誘導する効果を狙ったものと思われる。

西側山麓の目田池の東部一帯に段差をもつ平地がひろがり、現在は森林公园に利用されているが、この区域は根小屋群（注4）跡と推定され、池の近くで円形石組みの井戸跡が検出された。目田池の水深は浅く、湧水量も乏しいことから、本来の目的は根小屋群への侵入を阻む堀として設けられたものとみられる。

主峰の南側の各丘陵と東部の山腹各地に曲輪群が認められ、その一部には八幡宮や寺院も建てられている。

森林公园南側の丘陵には、山腹に空堀を圍らせ、頂部には小規模な居館が存在した形跡もみられる。北側に下降する土落谷一帯にも居館が存在したと伝えられている。（この谷の東部丘陵には、鞍部の削平地の2か所で焼結した土層と鉄滓が検出された。）

高櫛城の構造内には山裾から目田池のある山腹にかけて、各所に谷川や自噴する水源がある。目田池付近から主郭となる独立峰の頂部までの比高差は60mあるが、この山腹一帯では湧水地は見当らない。

地元の伝承によると、山頂には馬洗い池があり、その名は「星の井戸」とも呼ばれたということから検索を行った結果、その湧水池は主郭部の南端に近い位置で確認された。現状は縁石が内側に崩れ落ちて、大部分は土砂で埋没しているが、僅かにのこる凹地には渇水期でも帶水していることから、井戸跡と推定したものである。この山頂まで馬を上げていたことは考えられないし、馬を洗うほどの水量があったか否かはともかく、独立峰の頂に湧水池が存在する理由は、被圧地下水現象（注5）によるものと考えられ、城の造地にあたって築城の条件に適した場所であったといえる。

また、第二郭の東側、主郭部の崖下でも岩場からの滲透水の溜まる凹池があり、渇水期でも枯渇したことがないといわれている。

○明神山城跡（標高95m）

明神山城跡は高櫛城の構造内の中の出丸で、須佐川と波多川の合流点に南側から突出した小丘陵にある。遺構は、頂部から下る稜線と緩斜面に曲輪群が設けられており、曲輪の一部は墓地に転用されている。

この墓地の一角に石を積み重ねた高まりがあったが、この石は宝篋印塔と五輪塔の残欠であった。この城跡の南側の丘陵には石積みの古墓群と、城督、熊谷広実の墓碑があり、南側の山腹には熊谷家の菩提寺であったと伝えられている久光寺がある。

○秋森城跡（標高130m）

高櫛城の南の反辺谷川に面した小丘陵上に設け、この山も明神山と呼ばれている。

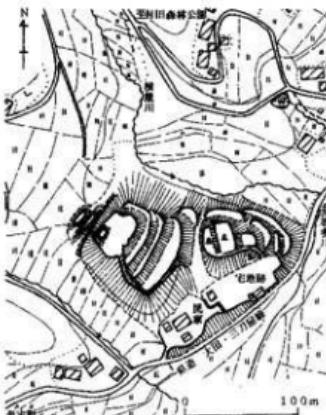
山頂を主郭として、南側に下る斜面に階段状の腰曲輪を回らせ、登り道は西側に迂回する堀割の底を通って頂部に達する。

頂部には祭壇跡とみられる高まりがあり、傍に自然石をくり抜いた手洗鉢が残されていた。この背後となる北側斜面は削り落した壁となっているが、この裾部は二重の掘切で遮断している。

東側の小さい丘陵に続く鞍部は、幅広い堀割となっている。この丘陵にも頂部から東、北側の斜面に曲輪の跡がみられるが、南側には宅地跡があり、かつては館があったものと思われ、近くに古墓がある。

地元の伝承によると、この城は高櫛城の見張所がおかれたところといわれている。

○曾我里峰城跡（標高198m）一略測図を省略



第8図 秋森城跡略測図

波多川の右岸に張り出した尾根の頂部が主郭部と推定された。高橋城から東側の眼下に見下す位置にあり、山頂から西に下る斜面に曲輪群が展開する小規模な城跡である。

東側の鞍部は幅広い細切となる際で、西須佐地区から東須佐地区に至る古い街道が通ることから、街道の押さえと、高橋城の死角となる部分を補完する城であったと思われる。

○高西城跡（標高 110 m）

波多川と反辺谷川の合流点に南方から岬状に突出する細長いやせ尾根上に設けられた城跡である。

先端の円錐状の小山は背後を堀切で遮断した物見台となっている。続く稜線上には土壘跡も残り、稜線を最大限に活用した幅広い削平地が続き、鞍部に曲輪と陸橋を組み合せて、山裾に下る通路を設けて一つの区切りとしている。

鞍部から南の丘陵頂部まで再び陸橋でつなないだあと、広い曲輪群を設け、末端を堀切で遮断している。この堀切の底は峠（掘壁峠）となり、波多川沿いから反辺谷へ通ずる近道となっている。

この地点は、波多川沿岸から西部山岳地を経由して神戸川沿岸に下り、更に石見地方に通ずる街道の入口にあたる。

この城山は、地元では社日山と呼んでおり、主郭部の南端には祭壇状の高まりがあり、近くに五神塔や石燈籠なども残っている。

○三久保田城跡（標高 220 m）一略測図を省略

中字別所にある城跡である。この地区は反辺谷川一帯を南側から見下す高台の上の集落で、古い街道は、この城跡の真下から山岳地に入り、御幡、大山、吉野を経由して石見に通する。

城としての遺構は、小さな稜線を形成する山の中腹から山裾まで、階段状の曲輪を配置し、最上段の曲輪は広い敷地となり、周りを土塁で囲んでいる。この位置は、下から曲輪群の中を通る街道を見下しており、別所地区全域も見通し、北側正面に高橋城が見える。（この山麓西側には鉢跡が検出された。）

別所地区への進入路は、北側の台地の裾から迂回して登る道がいくつかある。その入口の細長い丘陵には「小丸」の地名が残り、頂部から山腹にかけて曲輪の地形がよく残されている。

○湯村城跡（標高 274 m）

波多川右岸に突出した尾根で、位置は大字反辺と大字大呂の境界にあたる。



第9図 高西城跡略測図

山頂の中央には換台を設けた形跡がみられ、この部分を主郭部と推定した。近くの上下2か所の曲輪には円形の凹地があった。

北側の山腹と山裾にも曲輪群が配置されており、山裾の曲輪群の東端に湯村神社跡地がある。（祭祀跡参照）

谷を挟んだ北側の山裾に張り出した丘陵にも、曲輪らしい削平地があって、谷の両側から城地への侵入路を見通す格好になっている。

南西側の山腹から山裾にかけても削平段があり、裾部は切岸となっている。

この山頂からの展望は、高権城を正面にみるもので、特に高権城の死角となる波多川上流部を見通す位置にある。

大字大呂・波多川流域の城跡

○才ノ峠城跡（標高275m）

波多川右岸の台地上に集落（中字平野）がある。その東側の棱線上に設け

られた城跡で、この稜線は大字大呂と大字原田との境界となっている。

主郭となる部分は、峠の南側山頂と推定したが、ここは三方にのびる尾根に広い曲輪群を設け、東側の掘切で遮断した尾根の先端にも曲輪、腰曲輪を設けている。

南側にのびる稜線のつけ根は、削り落した壁として直下の曲輪から南下する稜線を陸橋にし、途中に迂回して登る曲輪を配置しながら、南部の広い削平地のある山頂部に達する。この山頂部は、稜線や鞍部を広く削平しており、一部に土塁で囲んだ曲輪もあり、この地点から堀割の道が原田地区の奥部に下っている。

この城跡についての記録とは断定できないが、大字原田の風土神社由緒記に「矢領山城主勝部筑前守」の名が見える。

しかし、今まで矢領山城の位置が特定されていなかった。今度の調査によって、この城が矢領山城に該当するものではないか、と思われる点がいくつかある。

それは、稜線に矢ノ谷があり、峠道は峰坂と呼ばれ、落城伝説がある。この周辺にはこれほどの規模の城跡が見当らない。

（才ノ峠城の名称については、地元で広く使われている地名を取り入れた。）



第10図 湯村城跡略測図

○茶巻山城跡（標高 182 m）

波多川左岸に突出した尾根の先端にあり、地元では秋葉山とも呼び、山頂に秋葉神の祠がある。

城山の中では小規模な部類に属するものである。

主郭となる山頂には巨岩が多く、その間隙を削平して迷路のような複雑な地形にしており、南東側の斜面は絶壁となる。

主郭部の西側の直下から緩斜面が鞍部まで続くが、この斜面には放射状に 7 条の堅堀群がある。（注 3）これは歎型阻塞と呼ばれる緩斜面強化のための構造で、西須佐地区では高柳城と、この城の南方の対岸にある八幡山城でも確認されている。

歎型阻塞の上段には腰曲輪を設けて、各堀底を至近距離から見下している。

北西の尾根に続く鞍部は小さな堀切で遮断しているが、その西側の丘陵の背後を大堀切で切断し、独立峰に仕立てている。

北側の台地にのびる稜線は先端まで、曲輪、堀切、土塁、腰曲輪などを連続して配置した構造がみられる。

○三の宮城跡（標高 290 m）

この城山は三の宮地区の中心部にあり、周りの山裾の 3 か所に出丸と推定される城郭がある。

特に東側山裾の三嶽神社の裏山一帯と、北側の寺床谷入口の寺床城跡（略測図を省略）は、その地形をよく残している。

主な造構は、南西側から波多川に張り出した尾根上に周囲を陥落な崖とし、主郭部を中心にして段差をもつ広い曲輪群を配置している。各曲輪は通路で結ばれて主郭を一周しており、造構全体が原形をよく残したものといえる。

南側の峰に至る鞍部は両側を削り落した陸橋にした揚手とし、南側の東西にのびる稜線にも曲輪群を陸橋でつないでいる。



第 11 図 オノ崎城跡略測図

この稜線の西側、主峰の直下は堀切と土塁で遮断し、東側の丘陵頂部を中心に曲輪群を配置している。頂部中央の小さな高まりは祭祀跡とみられる。この稜線の南側山裾には丸山城跡があり、この地点との比高差は 80 m である。

○竜体谷城跡（標高 260 m）

波多川右岸に東側から張り出した尾根の先端に設けられ、波多川沿岸から東山中方面に至る南北両側の谷の入口を見下している。

主郭となる頂部は 3 段の曲輪を石積みで区画した段差にしている。（この石積みは自然石を 2、3 段積みあげた素朴な作りで、土止めていどのものである。）

最上段の曲輪には、祭祀跡と推定した小さな石積みの区画があった。

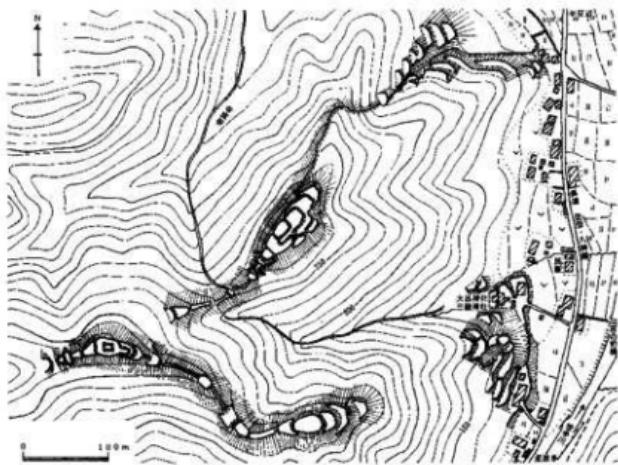
西にのびる稜線は、主郭の直下を削り落した壁と堀切で遮断するが、その先端にも曲輪群を設け、この部分でも土止め石の配列がみられた。

東側の稜線も主郭直下を削り落した壁とし、三重の堀切と土塁を連続させて、主郭への進入路を遮断している。

北側へ下る稜線にも 1 本の堀切を設け、稜線上に小曲輪を山裾近くまで設けている。



第12図 茶唐山城跡略測図



第13図 三の宮城跡略測図

この山裾は竜体谷川が西流するが、谷の対岸に「小丸」の地名が残る二つの小山（三の宮小丸跡）がある。この谷にも東部の東山中地区に通ずる街道があることから、小丸は谷の入口の

物見と押さえの城であったことが考えられる。

○丸山城跡

(標高 170 m)

波多川左岸に北西側から岬状に張り出した高台に設けられた城跡である。この台地の先端部と神積地との比高差は約 30 m ある。

城跡として特に目立つ防護施設は認められず、台地上の緩斜面を切岸で高度差を設けた階段状の地形が山裾まで続いている。

史料(注 1)によるところ、丸山城は高橋城の支城で「城主熊谷民部、少輔」の名が伝えられている。

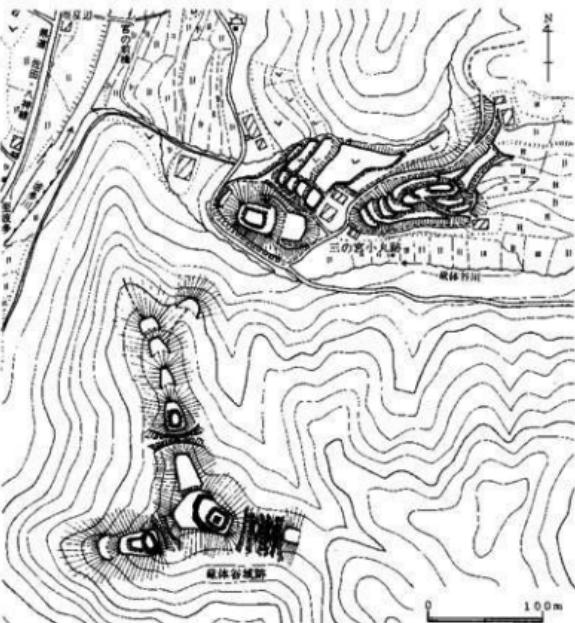
この台地を挟む南北両側の山には、三の宮城跡と坂本・堂床城跡があり、対岸の正面には八幡山城がある。

(北側山裾の朽木焼鍛冶屋の伝承は古く、先祖は出雲大社の本殿が十六丈から現在の高さに建て替えられる時、金具を打ちに出たと伝えられている。)

○八幡山城跡 (標高 176 m)

丸山城の対岸に南東から張り出した尾根の先端にあって、山腹には八幡宮の跡地がある。

城の構造は、山頂を主郭とし、背後となる南側を大形の土壘状に削り残して壁にしている。前方と側面には土塁や腰曲輪を設け、北東に下る尾根に曲輪を階段



第 14 図 電体谷城跡略測図



第 15 図 丸山城跡略測図

状に配置している。

主郭部の南東側の斜面は削り落した壁とし、その下部の稜線の南側は、波多川まで下る急峻な崖であるが、北側は緩斜面になっている。この緩斜面には、稜線から下方に向けて5条の豊畠群（歓型阻塞）（注3）が設けられており、この構造を稜線の端からみると、五つの小山が並んでいるように見える。これは下からの侵攻だけでなく、稜線上の侵攻に対しても大きな障壁になっている。歓型阻塞の地方的な呼び方として「連珠砦」があるが、その表現通りとも言える地形である。

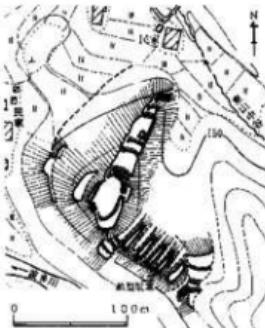
この稜線の先端も削り落した壁にしており、その下部には堀切と反対側の斜面に、短い土塁を前面に設けた曲輪がある。この部分の土塁は「扉」（注6）といわれる攻め出し口ともみられるが、背後に隣接する施設は消滅している。

この八幡山城の西側川岸の小丘陵は、周囲を削り落した切岸とし、頂部から段状の削平地が土塁で囲まれており、地元に城跡の伝承がある。（庭反城跡）一略測図省略。

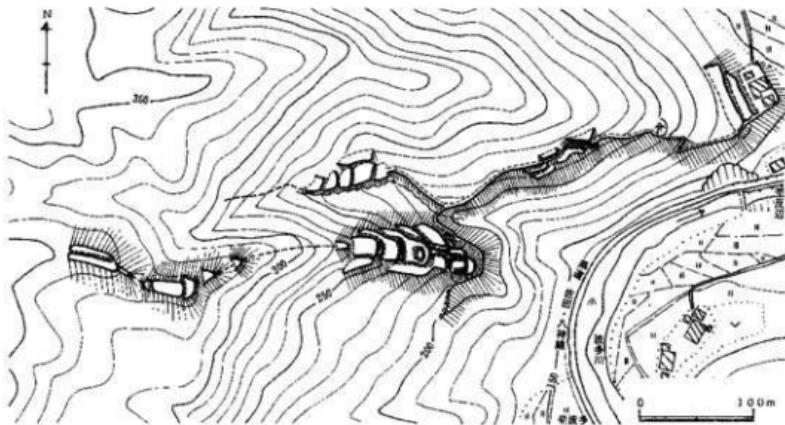
○坂本・堂床城跡（標高250m）

波多川沿いの城跡の中では、最南端にあり、西側から張り出した急峻な尾根の中間に設けられている。

主郭部は階段状に設けた曲輪群の中央部と推定され、物見台らしい壇状の高まりがある。各曲輪の間は迂回する柵割の道で結ばれ、下部の二段の曲輪は周りを高い土塁で囲み、南側の谷



第16図 八幡山城跡略測図



第17図 坂本・堂床城跡略測図

に面して虎口が開かれている。

大手となる登り道は、丸山城跡の南側の削平段から山腹を横切るが、途中で曲輪群の中の堀割の底を通過させている。

主郭部の西側は梯手となり、稜線上に曲輪を断続的に設けて谷底の道を見下している。谷底の道は荒廃しており、途中で消滅しているが、かつては西部の大山地区に通ずる街道で、城跡付近から山裾まではよく整った山道があり、途中に小堂が建てられている。

大字大呂・東山中地区の城跡

東山中地区は、佐田町中央部の南端にあり、標高300m～350mの山地に展開する高地の集落である。

この地区へは、周囲7方向から通路が集中する。つまり、山岳地帯を通過する街道の分岐点となる要衝であったといえる。

城跡は、各街道の出入口となる谷沿いの丘陵上に配置されており、その数の多いことから、集団城郭とも言える形態である。

○南部の城郭群（標高340m～439m）

東山中地区の南側の城跡は、南西の三方からの街道を見下す位置にあり、西端の標高439mの山頂には石碑の立つ曲輪を中心に、四方にのびる稜線上に曲輪を連続させている。

この山頂からの展望は、波多川下流部と左岸の山々が遠望できる。

北東に下る尾根の先端（四つの尾根）には曲輪、堀切、鞍橋などを組合せた構造がみられ、特に南側の尾根によく残っている。

中央の丘陵はY形の稜線が南北に細長く、二つの頂部からなり、北西側の頂部削平地には、祭祀の礎石とみられる4個の川石が置かれている。

南東の丘の頂部が主郭と推定され、中央の複数跡とみられる高まりを中心に曲輪群を設け、特に南に下る稜線上に細長い曲輪を連続させている。山腹には等高線に沿って、ほぼ一周する通路があり、途中に曲輪が設けられているが、北側の道路上の曲輪は屏風折の地形を残している。

東側の尾根の先端には、稜線上の2か所に削平地があり、陸橋で結ばれている。先端の削平地の下部は周囲に曲輪群を設け、南側には3条の不規則な堅堀で山腹での横移動を封じている。

これら各城郭群の山裾を南下する道は、掛合町の穴見、波多方面に通ずる3本の街道がある。

○中央部の城跡（標高360m）

東山中地区の中央で、東西に細長くのびる丘陵にあり、東端に円錐状の小山がある。この山は「すくも塚」と呼ばれているが、山頂の削平地のはかに遺構は見当らない。

すくも塚の西側一帯の丘陵は、草地造成によって原地形は損われているが、中央の山頂からのびる二つの稜線上には曲輪群を連続させており、一部は土壁で囲んだ曲輪もある。山裾一帯は削り落して切岸となっている。

○北部の城郭群（標高300m～340m）

西側の波多川沿岸からこの地区への進入路は、4か所の丘陵上から見下しており、最も重視



第18図 東山中地区城郭群略測図

されていた街道と思われる。

各丘陵とも、頂部から下降する稜線に階段状に曲輪を連続させている。

「東中山北谷」の南東側の大小二つの丘陵は、谷間を北上する間道と、北側の峠越えからの道も見下す位置にあって、主郭と推定した山頂には柵台を設けた地形がみられる。

北端の峠は、三の宮地区の竜体谷からの道が通じており、峠は両側の山裾から張り出した土壘で遮断され、中央を開いて虎口をしている。また、東側の南北にのびる稜線上にも曲輪群を設け、稜線先端の曲輪は北側の谷を見下している。

○東浦城跡

(標高330m)

東中山地区の中心から離れた北東の山で、この地点は東須佐地区の大字原田の白瀧と三坂方面に通する街道の分岐点である。

城跡は、谷を挟む二つの山の山頂から山裾にかけて遺構がみられる。西側の人家の裏山は、山頂と稜線上に広い曲輪を配置し、南西に下る斜面にも曲輪を設けており、複雑な構造はみられない。

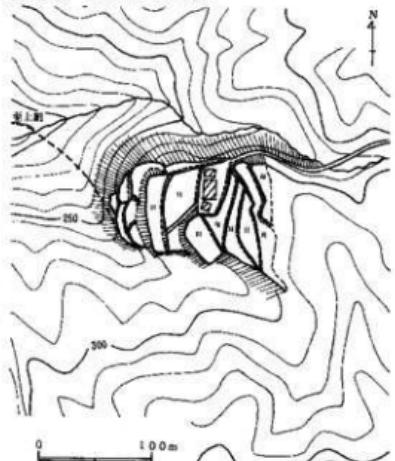
東側の山裾には、谷側から二又に分れる通路の奥を、高い土塁で囲んだ袋小路にしており、近世城郭の「懸郭」の形態に似た構造をみせ、正面上部の土塁の両側を開けて虎口にしている。また、袋小路の南側側面の土塁にも虎口が開けられているが、この谷側に面した土塁は、骨材として鉄滓が積まれている点が注意される。この北側の斜面と、北にのびる稜線上には曲輪群を連続させて両側の谷を見下している。(南側の道路沿いの露頭で、焼結した土や鉄滓が検出され、鉢跡と推定した。)

○神馬原城跡 (標高300m)

東浦城跡が東中山地区北端の城であるのに



第19図 東浦城跡略測図



第20図 神馬原城跡略測図

対して、この城跡は地域の南端にあって、波多川沿岸を見下す位置にある。この地点は、波多川沿岸から急峻な坂道の途中に開けた緩斜面で、川沿いから東山中地区に通ずる最短経路となり、間道の押さえとして配置された出城とみることができる。

城跡の遺構とみられる部分は、階段状の耕地の先端部で、下方に通ずる道を見下す形に、小さな曲輪群が設けられた単純な構造である。

この位置からの展望は、波多川下流部と対岸の山岳地帯が一望できる。視界の乏しい東山中地区の、監視と情報伝達の拠点であったことが考えられる。

この付近の地名には「御崎谷、山ノ神谷、隠尾、神馬原」などがある。

大字大呂・御幡地区の城跡

波多川左岸から西側に続く山岳地帯で、右岸の東山中に対して「西山中」と呼ばれる地域である。古い街道は、川沿いの地帯から谷筋を通る道が多くあるが、主な道は大字反辺から別所、御幡を経由して吉野を越え、神戸川沿岸に通ずる道がある。

尼子、毛利による雲芸攻防の戦記（注2）では、この道が高橋城を拠点とした尼子方の軍勢の往来が激しかったことを伝えている。

○高丸城跡（標高330m）

御幡地区の東側の地区で、反辺谷川に沿って三方の尾根が集中する独立峰があり、山頂には土塁で囲んだ曲輪群を置き、北東にのびる稜線と東側山腹に曲輪を連続させている。稜線の裾部にも土塁で囲んだ曲輪や堅堀がある。

北側の山腰にも土塁で囲んだ3段の曲輪群があり、その下には街道が谷底から登ってきている。この道は山腹を横切って東側の河内神社を経て大山方面に続く。

この神社境内は、周囲を土塁で囲んだ曲輪跡が転用されている。（神社は近世に移転されたもので、元は東山中地区に建てられていた。）

この周辺の地名は「大内、源氏原、藏本、小丸」などがあり、高丸城のほかに

も城が存在したことが考えられるが、後世のかんな流しによって地形は大きく変化している。

○大丸城跡（標高270m）

谷を挟んで、高丸城の西側に対向する城跡で、山腹一帯に棚田がひろがるが、前後は急斜面となっている。北東にのびる稜線の先端は、背後を切りで遮断した高地上に曲輪を設けた物見



第21図 高丸城跡略測図

台とし、反辺谷下流部を見下している。

主郭部は宅地付近とみられ、その周辺は水田となっているが、それぞれ切岸状の段差がある。南側の山腹に出丸と推定される削平段があり、大丸と小道で結ばれている。

○中屋城跡（標高 320 m）

大丸城跡の南側の城跡で、谷の合流点に張り出した稜線と、山腹に腰曲輪や小曲輪群が展開する。

伝承によると、中世には「龍上山・柏王寺」があって、広い範囲に堂塔が建てられていたが、戦災によって全山焼失した。

この山頂には鐘撞台があったと伝えられるが、その位置は不明である。

南北側の緩斜面は広く、近年の草地造成のために原地形は損われているが部分的に切岸の地形は残っている。

東側に突出した尾根にも、付根を堀切で遮断し、その先端に設けた曲輪は谷川沿いの地を見下している。

○坂根城跡（標高 310 m）

中屋城跡の南側の城跡で、北東に張り出した尾根上にある。

反辺谷川に面した斜面には耕地がひろがる。この耕地は、それぞれが大きな段差をもっているが、中には通路を迂回させていることから、曲輪跡と推定される部分もある。

稜線の先端は二つに分かれるが、付根は堀切で遮断し、先端部に曲輪が設けられている。特に北東に張り出した尾根の先端には、高低差と迂回通路を組合せた大形の曲輪の配置となっており、揚手となる背後はゆるやかなやせ尾根となり、



第22図 大丸城跡略測図



第23図 中屋城跡略測図

西に細長く続く稜線上には深い堀割の底の道が、御幡地区西部の柏王の近くまで続いている。柏王は中世の寺院の名称であることから、注意される地域である。

○柏王城跡

(標高 330 m)

柏王の地名は、前述の「蘿上山・柏王寺」の伝説を裏付けたものと思われるが、この周辺で寺跡等に類する遺構は発見されていない。

この地域は御幡地区では最も高位置の集落で、町内の東部山岳地が一望できる。

城跡としては、まとまりをみせた遺構はないが、切岸状に段差をもつ耕地と丘陵上には、曲輪跡とみられる削平段や、竪土壠跡がある。

南側の谷に突出した台地には土壠で囲んだ区画や、その中に壇状の高まりがある。

北側の谷を囲む周りの丘陵には屏風折を形成する曲輪跡もみられる。

○前岩瀬城跡 (標高 333 m)

坂根城跡の南側の山で、東に張り出した尾根上にあって、街道の分岐点を見下している。

城跡の遺構は、尾根の先端から三方にのびる稜線上に曲輪を連続させている。



第24図 坂根城跡略測図



第25図 柏王城跡略測図

後線の頂部には巻台を設けた形跡があり、南に下る稜線には腰曲輪と、下段の広い曲輪を土塁で囲み、更にその下部にも腰曲輪を設けた構造がみられた。

西側の鞍部から下る谷にも曲輪を連続させ、更に西側の丘陵上にも土塁で囲んだ広い曲輪があり、稜線上の削平地は主峰の付け根まで達している。通路は検出できなかったが、背後は柏王に近い位置になる。

○重羅城跡

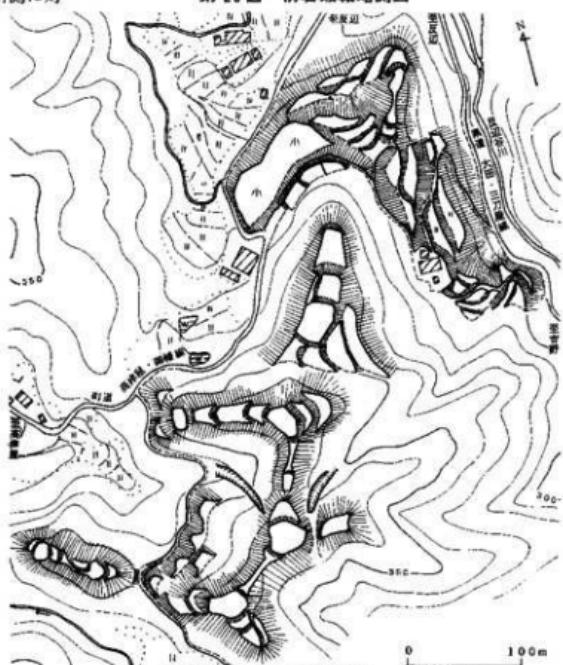
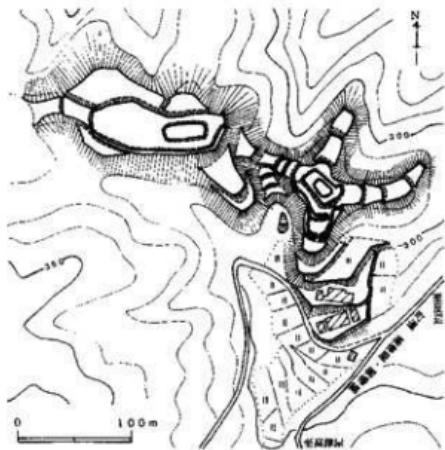
(標高 300 ~ 370 m)

前岩瀬城と谷を挟んだ南側に対向する城跡で、南北二群の城郭に分けられる。

北側の城跡は、やせ尾根と急峻な両側の山腹に曲輪を設けているが、特に東側斜面の大小の曲輪は、反辺谷川沿いの街道を眼下に見下している。

南側の山は、ゆるやかな稜線となっている。各尾根に曲輪を連続させ、西端の峠まで達している。

この峠は、旧神門郡と飯石郡との境界となっていたもので、この北東側斜面には屏風折の曲輪跡がみられる。湘剖の底を通る峠の両側の丘陵にも曲輪群が設けられているが、西側の小丘陵は北西側の斜面にひろがる大字



高津屋の上部の集落を見下している。

(「重羅」の名称は、この周辺の小字名「重羅垣内」を採用した。)

大字大呂・大山地区の城跡

この地区は、波多川沿岸から神戸川沿岸に通する街道の途中にあり、広域的にみると、東部出雲から石見部に至る山中の一拠点である。

地形は標高350m前後の丘陵に囲まれた高地の集落で、この地域への通路は7方向から集中している。

城跡とみられる遺構は地域全体にひろがっており、どれが主郭となる部分か不明瞭である。



第28図 大山城郭群略測図

したがって、大山地区の中心部の城跡は、一括して「大山城郭群」とした。このように集中的に城郭を配置した形態は、規模の相違はあるが「東集中」と非常によく似ており、立地条件や地形も共通したところが多い。

○大山城郭群（標高350m～400m）

この地域で特に遺構が明瞭な部分は、北側の東西に細長い二つの丘陵と、西側の低地に突出した4か所の小丘陵と、中央の山塊の西側山裾である。

ここでは周囲を高い土壁で囲んだ「黒櫓」の曲輪や、土壁の一方を開口した虎口、切岸、屏風折、帆船を組合せた曲輪群など多彩な構造をもって、谷沿いの道を見下している。

東側の山裾の露頭では、黒ボク土で埋もれている小規模な「片葉研堀」の遺構断面が観察され、上段の削平地に何らかの建物の存在を思わせる。

東側は波多川に面した斜面で、ここでは棚田が広く展開している。

下部の人家周辺は曲輪跡とみられる地形が南北に連続して、下からの通路を見下している。

この位置は「丸山城」の真西にあたり、近距離で結ぶ間道がある。

この地区全体に溜池が非常に多く、その位置は人家の近くや道沿いにあることが注意される。

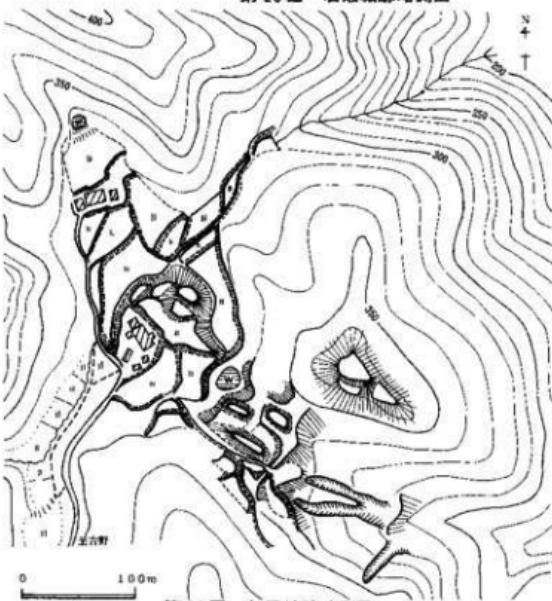
○岩瀬城跡

（標高320m）

反対谷川沿いの地域から大山地区に向う一つの入口にあたり、山腹の曲



第29図 岩瀬城跡略測図



第30図 打尾城跡略測図

輪群は階段状に稜線近くまで設けられ、通路が鞍部に達している。

鞍部から南側の尾根にかけては、削平地が広く一部に土壘跡も残り、南端の広い曲輪には推定される高まりがある。この位置は大山方面への道を眼下に見下すもので、監視を目的とした城跡とみられる。

○打尾城跡（標高 320 m）

岩瀬城が大山地区の西端に配置された城であれば、この城は東端の守りと推定される位置にある。山地の中で緩斜面に棚田がひろがっており、東側に下る谷沿いの道は波多川沿岸への近道である。

主郭となる部分は東側の丘陵付近と推定されるが、かなり流しによって原形は大きく損われ、鞍部に土壘跡と東側斜面に堅堀がみられるほか、明瞭な遺構はみられなかった。

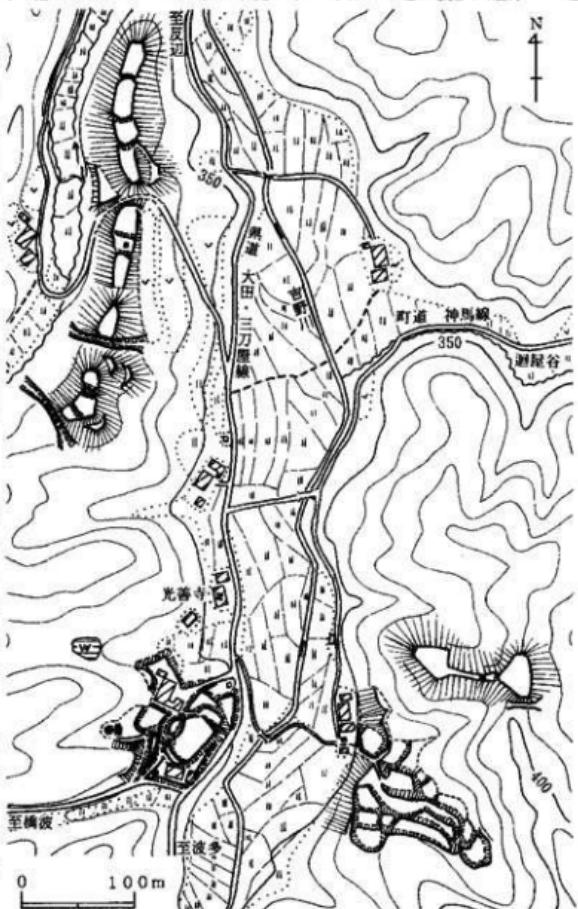
谷沿いの道の途中に波多川流域と東部の山岳地が一望できる地点があり、物見台を設けた形跡がみられる。

大字吉野地区の城跡

佐田町南端の盆地で標高 330 m～350 m の細長い沖積地がひろがる高地の集落で、かつては神門郡に属していた。

この地区から西側の山を下れば、神戸川流域の上横波地区に至るという街道の中継地であり、各地に向う道の分岐点でもあった。

軍事的に重視されて



第 21 図 ゆうげ(要害)城跡略測図

いたことは、永禄年間の雲芸攻防戦の戦記にも登場する地名であることからも推測できる。

城跡は二群に分けられるが、いずれも街道を見下しながら、地域全体を見通すという位置に設けられている。(この地域の特徴として、製鉄遺跡が非常に多いことで、この中には山城の時期に対応するものの存在も考えられる。)

○ゆうげ(要害)城跡(標高360m)

吉野地区北部の城跡で、沖積地との比高差は最も高い位置で40mある。これは地域全体が高所にあることを示している。

城の名称は、地元伝承の「ゆうげ」を探ったが、この地名は要害が変化したものといわれている。

城跡は南北に細長く続く丘陵の山裾と頂部にあって、その南端の地名が「ゆうげ」である。

ここは街道の分岐点となるところで、丘陵の付け根を二重堀切で遮断し、その先端の高台に階段状の曲輪が設けられている。南北にのびる丘陵は小刻みに谷が切れ込んでおり、各谷の奥には水源池があり、中には前面を土塁で遮へいした水源跡が残っている。

寺(光善寺)の北側には「土井」の地名があり、西側の稜線の南北両端を堀切で遮断した曲輪群がある。更に北にのびる稜線を大堀切で再び遮断(現状は峠道となっている)し、その北側後線にも削平地が連続して下降する。

吉野川を挟んで、ゆうげの東側の山腹と、北側の尾根の先端にも削平地がある。南側の斜面の最上部には、西側面を土塁で遮へいした構造がみられ、迂回する通路などから城跡とみることができる。この部分は、ゆうげ城の死角を補完する出丸であったと思われる。

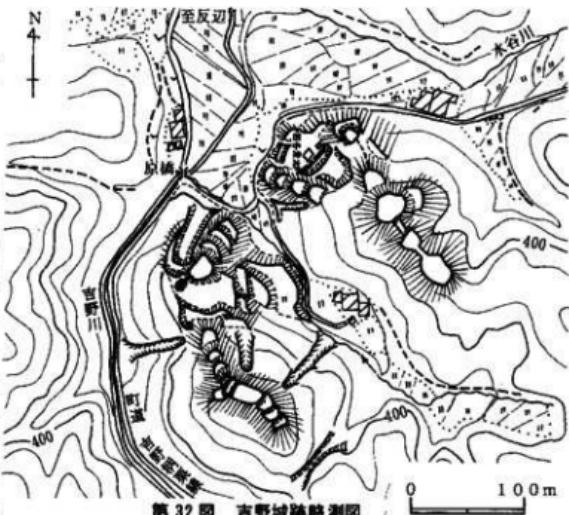
○吉野城跡

(標高420m)

吉野地区南部にあって、小字名「丈山」となっていることから踏査をした城跡である。

この城跡は、谷の分岐点の北側に張り出した独立峰で、その前面の東西の山裾にも、出丸跡と推定した曲輪群が設けられている。

城の造構は、北側に張り出した緩斜面の尾根の先端を、細長く削り取った堀割にして、その東側斜面から堀割を見下す曲



第32図 吉野城跡略測図

輪群を階段状に配置している。その南側は鞍部となり、広い平地が東西にひろがっているが、ここまで通路は東側の人家前から曲輪群を通り抜けて登っている。

この鞍部から堀割を見下す位置に「赤土居」と推定される小さな土塁が設けられている。この鞍部から南側の山頂が主郭と推定され、中央の広い曲輪を中心に、稜線上に曲輪が連続する。

南側の尾根続きの鞍部を大きく畳切って独立峰に仕立て、3本の不規則な堅堀で山腹での横移動を封じている。

北側の田中神社周辺と対岸には、大小の曲輪群があり、これらは出丸跡のようである。

注1. 渡邊修著『出雲稚古知今図説』（天保年間に成立）

「反部村 高矢倉ノ城主本庄越中守経光、島根郡本庄村ノ城主ナリシガ今此所ニ城ヲ築テ居住ス、此枝城トテ同村小矢倉ノ城 屏風山ノ城 須佐村ニ尾崎山ノ城又下り尾崎、立花ノ城并五ヶ所有リ子細不詳尼子方ヨリ毛利方ニ移ルト云。」「大呂村 丸山ノ城主熊谷民部少輔」

2. 勝田勝正校注『尼子毛利合戦・雲陽軍実記』

米原正義校注『陰徳大平記』

以上二つの戦記中の関係する記述は、永禄元年に石見地方の大半が、毛利軍の制圧下におかれるという本庄常光の報告に応じて、尼子晴久は反撃し、同年7月に石見東部での合戦に、毛利軍は後世「新原崩れ」と呼ばれる敗北をした。

この時の状況を『雲陽軍実記』は、高橋城を拠点として「歩卒の大将を河副美作守にそ定めらる。此の河副は万夫不当の勇猛にて、殊に歩戦に馴れたる人なれば、二千五百人を悉へて、別所、西山中、吉野に分かり、野伏せして折々は三瓶山の麓より、巌山近辺へ出て、夜働きし、敵の糧道を妨げ、奪ひ取って敵軍を苦しめけり……」と伝えてい る。

3. 島根県下で軌跡阻塞が確認されている城は、京羅木山城跡群、勝山城跡（広瀬町）、山吹城跡（大田市）、周布城跡（浜田市）、一本松城跡（金城町）、井村城跡、三隅城跡、鐘ノ尾城跡（三隅町）、七尾城跡、角井城跡（益田市）がある。（第3回全国城郭研究セミナー・1986）山根正明。

このほかに八幡山城跡（頃原町）、高橋城跡、伊秩城跡、立花城跡、茶磨山城跡、八幡山城跡（佐田町）がある。

4. 山上の防衛施設に対する山麓の居住地を指すが、平時のものではなく、軍営的居住地と考えられている。町内では「根小屋」の地名（小字名）は見当らないが、城跡の近くに「輪ノ内」が散見される。

5. 上下を粘土層など、不透水性の地層で制限された滲水層を満たしている地下水が上位の地盤によって加圧され、自噴に近い状態で湧出する地下水（地学辞典・平凡社刊）高橋山は安山岩質の凝灰岩で構成されているが、下層となる山根一帯は海成積成層で特に泥岩の優勢な地層となっている。

6. 「幕土居」とも呼ばれる施設で、小規模な土壘を設けて、城内を見透かされないようにしたもので、これによって矢石を防ぐことができる（中世城郭辞典・東京堂出版）
7. 城内が見透かされないように土壘を高くしたもの。「築城記」に「城の内も見えず、又土居も高く家も見えざるを黒構と云也」とある。（日本城郭大系・人物往来社）

3. 生産遺跡

鉛 跡

生産遺跡は、古来の製鉄法すなわち砂鉄還元の製鉄遺跡である鉛跡が多い。

この地方の鉄生産については『出雲国風土記』の記述の中で、須佐郷を流れる「波多川」の解説のあとに「鉄有」と記して、この地方で古代から砂鉄製鉄が行われていたことを伝えている。東須佐地区の大字宮内の「尾崎横穴群」では2群1号穴の玄室内で、須恵器と共に鉄滓が1個出土しており、風土記の時代に先行する古墳時代に、既に鉄製鉄が行われていたことを示唆するものとして注意される。

今度の調査によって発見、または再確認された製鉄遺跡は26か所で、佐田町全域で60か所近い鉛跡がある。これらはすべて地表面の観察によるもので、それも地名（小字名）の検討によって得た予備的な知識や、古者の証言によって鉄滓の堆積地から追求して発見した遺跡がほとんどである。

古い形式の鉛は小規模で、立地条件も谷に面した山腹の小さな削平地などが利用されており、多くの遺跡は、地下に埋没している可能性がある。今度の調査でも堆積土の下部で検出された遺跡が4か所あった。また荒れた山林のために手を組まれて、踏査が及ばなかった地域などを考えると、今までに発見された遺跡は一部分であって、今後の調査によってその数は更に増えることが予想される。

〈近世末期の鉛跡〉

近世末期に操業された鉛は、藩行政によって規制され、その体制は少数の鉄山師によって經營されたもので、大字大呂地区の鉛では飯石郡吉田村の田部氏の経営による「堂ヶ谷鉛」があり、大字吉野地区は神門郡に所属していたことから、神戸郡奥田儀村の桜井氏の経営による「吉原鉛」と「梅ヶ谷鉛」がある。

この三か所の鉛跡は、周辺の地形から推定して、大規模なものである。

特に吉原鉛は、鉛文書にもたびたび見られるもので、山腹に広く堆積している鉄滓の量からみて、数次にわたる操業がなされたものと思われる。

〈中世の山城の郭内及びその周辺の鉛跡〉

大字反辺の「垣内鉛跡」は、須佐地区から出雲方面に通ずる旧街道沿いの山腹にあり、削平地の規模は全長7.0mほどの小区画であることから、野鉛跡と推定した。この位置は「舟津城跡」の奥部である。

「高橋城跡」の主郭部北側の鞍部では、2か所で焼結した土層が観察され、鉄滓が散布しており、鉛と鍛冶跡が存在したものと思われる（土落鉛跡）。また目田池の東岸とその北側山

裾でも鉄滓が検出されたが、遺構は見当らなかった。

「屏風山城跡」の北側鞍部でも小規模な鉄跡がある（矢頭寺奥鉄跡）。

別所の「三久保田城跡」の山裾には「鉄」の地名があり、ここでは大形の鉄跡があり、金屋子神の祠もある（別所鉄跡）。

大字大呂の「丸山城跡」の西側山裾に「柄畠殿治跡」があり、城主が病死した際に廃絶したという伝承がある。

東山中地区の「東浦城跡」では、曲輪を囲む土堀に鉄滓が使用されており、近くの露頭で焼結した土層があることから、中世にさかのぼる鉄跡（東山中鉄跡）の存在を示唆している。

大山地区では「打尾城跡」の下部谷川に沿う水田の崖下で、鉄滓の堆積層があり、谷川で小形の鉄が発見された。ここでは2か所に鉄滓の堆積地があることから、複数の製鐵遺跡があったことが考えられる。（打尾1号、2号鉄跡）。

大字吉野では「ゆうげ城跡」の東側斜面で、鉄滓や焼土が検出されたが、遺構は確認できず埋没しているようである。

窯跡

窯跡は大字吉野に1か所、瓦窯跡がある。これは明治以降のもので、長くは続いていなかつたようである。

位置は「ゆうげ城跡」の東側山裾の県道沿いの畑で、現在でも焼土や瓦の破片が散布している。

4. 祭祀跡

祭祀跡は、神社、寺院、堂跡のほか、民間信仰の対象になっていた「才ノ神」「山ノ神」「水神」などの石碑や、御、殿治の守護神として祀られた「金屋子神」の祠も多い。

城跡に祭られている神社には「八幡宮」と「秋葉神」が多く、東山中の城跡では「みことさん」と呼ばれる祭神不明の碑があった。

地名（小字名）が残る寺跡は、大字反辺に「明藏寺」「小御堂」があり、大字大呂には「清泉寺」「慶雲庵」「善正寺」「大願寺」「久光寺」「無生堂」のほか、「寺床」がある。

御輜地区には「柏王」の地名があるが、これは中世の寺院の名称と伝えられている（26頁参照）。

大字吉野には「弁堂」のほかに「上堂、下堂、堂ノ元、堂迫」など、堂の字をあてた地名が多い。



熱田宮の神護寺と伝えられる「清泉寺」跡地

神社に関する地名は「熱田宮」「八幡宮」「布施の宮」があり、この社は現在は近くの神社に合祀されている。

地名に現われない神社として、大字反辺の「湯村城跡」の北側山裾の「湯村神社跡」がありこの社は多倍神社に合祀されている。

東山中地区には「河内神社跡」があるが、この社は御権地区に移されている。

「熱田宮」は、石清水八幡宮の別宮跡で、近世の初期に大字反辺に遷座され、後に多倍神社に合祀されている。「清泉寺」は、その神官守であったと伝えられている。（2頁参照）

5. 古墓・塚

宝篋印塔、五輪塔、石積みなどの古墓は、高龜城の周辺に点在しているが、その数は少ない。

高龜城跡の主峰南側の台地先端には、「殿様墓」と呼ばれている2基の宝篋印塔がある。2基とも下部の基壇は消失し、風化のため細部の構造は消えているが、整った形を残している。

この周りに散乱している大小の石は、墓域を区画した石郭だけでなく、石積みの墓もあったと思われる。

この南側の多倍神社の裏山の削平段に、宝篋印塔1基分と五輪塔の残欠（風空輪）がある。宝篋印塔は、塔身と相輪の上部が欠けていた。



高龜城跡の殿様墓



庭反城跡の変化した宝篋印塔

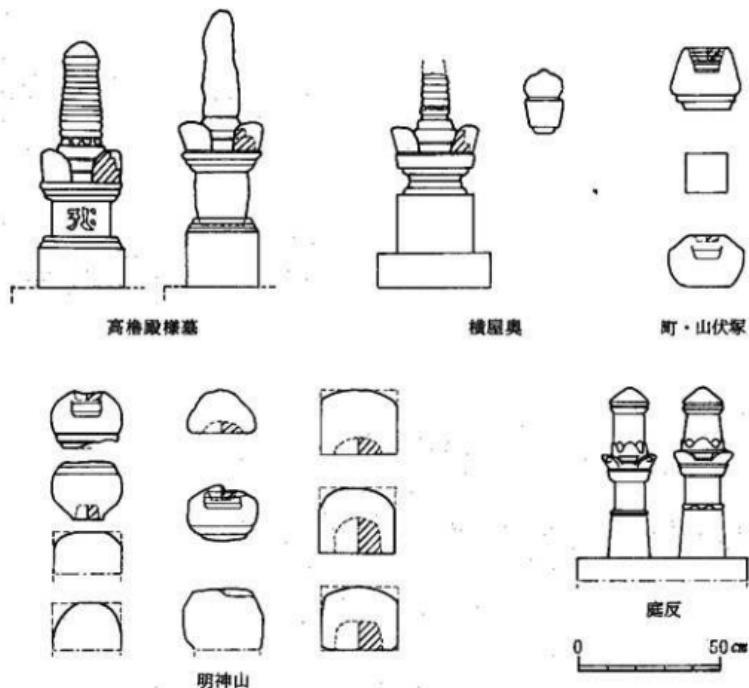
波多川に面した南東側の棚田の畔に「山伏冢」と呼ばれている2基分の宝篋印塔の残欠があるが、風化による損傷がはげしい。

波多川と須佐川合流点に張り出した「明神山城跡」の曲輪群は、墓地に転用されているが、その一隅に宝篋印塔と五輪塔の残欠が積み重ねられていた。

これらの石材は、軟質の凝灰岩であるため損傷がひどく、原形がかろうじて識別できるものであつ

た。石積みの墓も高権城跡周辺に点在するが、明神山城跡の南側の丘陵に多くみられ、ここには後世に建てられた城主・熊谷広実の墓碑もある。

大字大呂の「庭反城跡」の頂部の曲輪群も墓地に転用されているが、ここでは宝匣印塔を便化した2基の石塔がある。1基は一石作りであるが、別の1基は相輪に相当する部分がはめ込みになっている。



第33図 古墓・石塔・石塔の残欠実測図

V むすび

今年度をもって3か年にわたる遺跡調査が終わり、佐田町全域の調査が完了した。発見された遺跡の中で、特に中世の山城跡と、鉢跡が多かった。これは大形の遺跡で目につきやすいということだけでなく、全町で5,500か所の地名（小字名）におうところである。地名は、かなりの数が整理され、消滅しているとはいへ、その大勢は失われておらず、多くの示唆を与えた。

その地名の中で最も多くみられたのが城や鉢に関するものであり、それほど地域住民と深いかかわりをもっていた証左である。

調査の時期は、春から秋にかけてという、季節に限定されたことから、生い繁る雑草や樹木に阻まれて、小規模な遺跡や遺物が検出できなかったことは今後に残した大きな課題である。

古代遺跡として明らかなものは、大字大呂の八幡古墳がある。

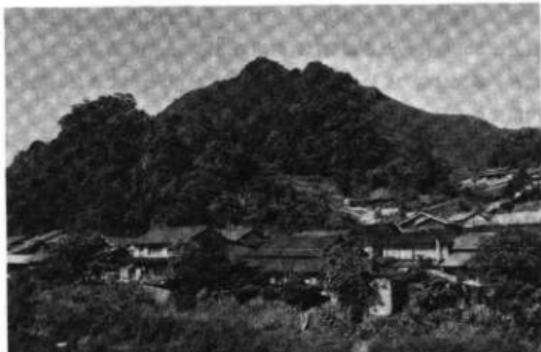
巨石を使った横穴式石室のこの古墳は、渡道入口付近が欠失しているものの、玄室の形は無袖形で、横田町、頃原町など奥出雲地方でも発見されており、山陽側に多く後期古墳の一般的形式として盛行している。

のことから、当方も山陽側の影響を受けることは十分考えられることで、この古墳は山陽側の古墳文化の系統を引いている、ということができる。

城跡は西須佐地区に35か所あり、全町で80か所を超える数になる。

の中でも大字反辺の高櫓城跡は町内唯一の規模で一城別郭の配置構造や、特異な施設がみられるだけでなく、その終末期が知られていることは歴史的にも価値のある城跡といえる。

特異な施設とは敵型阻塞を指すが、これは昨年までの調査で大字一連田の伊秩城跡、大字宮内の立花城跡でも発見されて



前方の小山には物見跡がある。高櫓城跡の遠景（左側）
（北側から撮影）

おり、今度の調査で大字大呂の2か所の山城でも発見された。近い例では頃原町大字角井の八幡山城でも発見されている。

こうした山城には、高い石垣や建造物ではなく、土木工事によって設定された高低差と屈曲性を組合せた造作にすぎず、今日われわれが見る城の印象とはほど違るものである。

しかし、調査によって得た感触は、部分的に破却され、埋立てられているとはいへ、現在でも活性のある機能体として迫力を感じるものである。

近年、中世城郭の調査、研究が各地で行われている中で、本調査の結果が更に広範囲にわたる資料の比較、検討や、考古学的方法による調査などによって、その発生、分布形態、築城編年などの手がかりとなることを期待したい。

鉛跡については、近世末期の鉄山師の経営によって操業時期の知られている高殿鉛のほかに中小規模の鉛跡も多く、その数は町内全域で60か所になる。

中小規模の鉛跡は山腹の斜面などにあり、立地条件が悪いことから長い年月の間に埋没したものや、深山のため、踏査が及ばなかった地域もある。また、鉛製鉄業が元来、移動性をもつたことなどを考え合せると、遺跡の数は更に増えることは間違いない。

城跡の郭内で発見された鉛、鍛冶跡の中にその当時の城に付属した施設であったことも考えられる。

また『出雲国風土記』の記述や、近くの横穴から須恵器と共に出土した鉄滓は、遠く古代にさかのぼる遺跡の存在を示唆している。

今後、鉛跡についても、考古学的、自然科学的な調査がなされることにより、それが鉛研究の一助ともなれば幸いである。

祭祀跡は社会の表面で活動を続けてきた仏教、神道にかかる遺跡のほかに、靈地の觀念や伝承にもとづく原始的信仰や、民間信仰の対象となった石碑などがあり、地名にもさまざまな表現で残されている。

しかし、現在は人びとの関心もうすく、何を祀るものか不明のものが多かった。

以上、3年度にわたる調査は、町内の遺跡の土地所有者をはじめ、古老の方がたの助言や案内など、多大な協力をいただき順調に行なうことができた。紙上をもって厚く感謝申しあげる次第である。

この調査結果は本町の埋蔵文化財のすべてではなく、今後の調査を一つの手がかりとして、今後、本町の遺跡の実態を明らかにする、そのいとぐちとなることを期待してむすびとする。

参考文献

- 島根県教育委員会 「島根県生産遺跡分布調査報告書・出雲郡製鉄遺跡」(1983)
- 島根県教育委員会 「島根県遺跡地図(1)出雲・隱岐編」(1987)
- 加藤義成校注 「修訂出雲國風上記参究」(1981)
- 蓮岡法輔 「飯石郡頃原町、比丘尼塚古墳調査報告概要」(1974)
- 勝田勝年校注 「尼子毛利、合戦雲陽軍実記」(1978)
- 米原正義校注 「陰徳大平記」正徳二年板本(1984)
- 村田修三編 「因歳中世城郭事典」(1987)
- 鳥羽正雄 「日本城郭史の再検討」(1980)
- 中世城郭研究会編 「中世城郭研究」(1987)
- 佐田町 「佐田町史」(昭和51年)(1976)
- 佐田町教育委員会 「佐田町内「字」調査表」(1985)
- 佐田町教育委員会 「私たちの郷土佐田町」(1987)

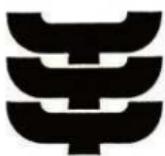
佐田町埋蔵文化財詳細分布調査報告 3

西須佐地区

発行者 島根県簸川郡佐田町大字反辺
佐田町教育委員会

1989年3月25日 印刷
1989年3月31日 発行

印刷者 島根県出雲市今市町 宇田印刷



文化財愛護
シンボルマーク